

八ヶ岳南麓地域における観光地の 카테고리集約に基づく目的地選択分析

山梨大学 工学部土木環境工学科 学生会員 ○山崎 慧太
 山梨大学 大学院医学工学総合研究部 正会員 佐々木邦明

1. はじめに

観光庁の観光圏整備法施行以降、現在（2011年1月20日現在）までに全国で45の地域が観光圏に認定されている。これは、観光地を広範囲の圏域としてとらえることで、地域同士での協力・創意工夫・魅力度の相乗効果を期待しているものである。しかし、観光地における具体的な観光推進施策には課題があり、観光施設が想定する観光客と情報を得て実際に訪れる観光客にはミスマッチ等が存在し、それがかえって観光地の魅力を低減する可能性が指摘されている。そのような問題を回避するためには、観光客の特性を適切にとらえることが必要である。

そのためには観光客の行動データに基づいた分析等が必要となるが、観光客の訪問場所が観光圏のような広い範囲に及ぶ場合には、通常の選択モデルスキームでの分析は困難である。そのために訪問地を何らかの特性に従って集約^(4, 2)しなければならない。

鈴木ら⁽³⁾は本研究に先立って、八ヶ岳南麓地域を対象に調査を行い、訪問地を自治体単位に集約することで、地域間の繋がり（地域別の目的地としての選択の連関）を分析し、現行政区単位でのエリア組み合わせによる望ましい観光圏域の設定について検討を行った。そのモデルから対象地域の各エリアの客層の特徴や、訪問エリアを組み合わせる際に影響を与える要因を把握した。しかし、訪問スポットを選択する際に影響を与えている要因については分析を行っていない。

本研究は、同じデータを用いて観光客の訪問地の

キーワード：周遊行動，アンケート調査，選択行動モデル

山梨大学土木環境工学科交通工学講座

(〒400-8511 甲府市武田 4-3-11 Tel/Fax 055-220-8671)

E-mail : t07c069@yamanashi.ac.jp

選択特性を観光地のカテゴリーの選択行動モデルを用いて周遊行動を分析することを試みる。それによって、対象地域における、観光客が訪問スポットを選ぶ際に影響を与える要因を明らかにすることを目的とする。

2. 観光行動調査の概要

本研究で利用するのは山梨大学の交通工学講座が北杜市観光課の協力を得て、独自に実施したアンケート調査である。調査の概要を表-1に示す。アンケートの配布は、八ヶ岳地域を周遊する観光客のほとんどをとらえることができると想定される北杜市内の4ヶ所の主要観光施設で配布した。この地域は昨年、北杜市および長野県の富士見町と原村で八ヶ岳観光圏として観光庁より観光圏の認定を受けている。また、宿泊客と日帰り客の両方の観光客のデータを得られるよう、3連休の中日に調査を行い、各配布場所別に300程度の配布を行った。それぞれの配布場所での回収率を表-2に示す。

表-1 周遊行動調査概要

調査日	平成21年10月11日(日)
調査方法	街頭配布・郵送回収
配布部数	1181部
回収部数	501部(回収率42.4%)

表-2 調査場所別回収率

配布場所	回収/配布	回収率
東沢大橋	89/160	55.6%
清泉寮	159/440	36.1%
スパティオ小淵沢	133/281	47.3%
道の駅はくしゅう	120/300	40.0%
計	501/1181	42.4%

アンケートの内容は、個人属性（性別・年齢・居住地・八ヶ岳エリア来訪回数等）、旅行形態（来訪手段・同行者数・旅行プラン作成者等）、周遊行動（旅行目的・食事店舗名・当日の周遊順序等）などの項目を尋ねた。

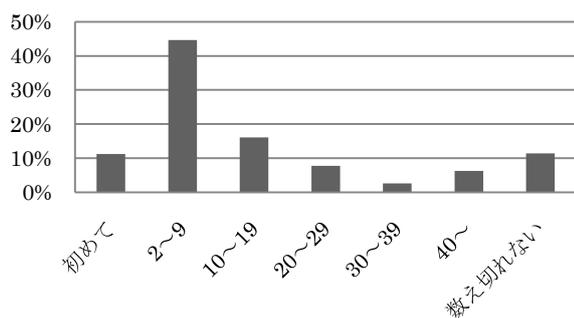
3. アンケート調査集計

主な特徴を下の表に示す。

表一3 主な特徴

年齢・性別	30～60代が中心，男女同数
居住地	関東が過半数
滞在日数	46%が宿泊客
主な来訪目的	自然景勝地・観光施設・買物など

また食事目的で訪れた回答者も約13%おり、かつその回答者全員が何を食べて来て訪れたのかあらかじめ決まっていた。本調査では八ヶ岳エリアへの来訪回数も訪ねており、その結果を図一1に示す。全体の約90%以上がリピーターであるという結果になり、再度訪れたいかという項目に関しては、ぜひ訪れたい、再び訪れたいという回答が90%に達し、観光地として満足度の高い地域であるということが分かる。

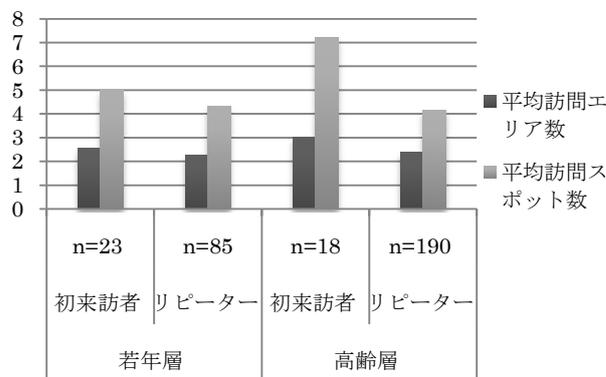


図一1 回答者の八ヶ岳エリアへの来訪回数

4. 周遊行動に関する集計

ここでは、回答者の周遊行動に関する集計結果をまとめる。本調査の回答をもとに、旧行政区での目

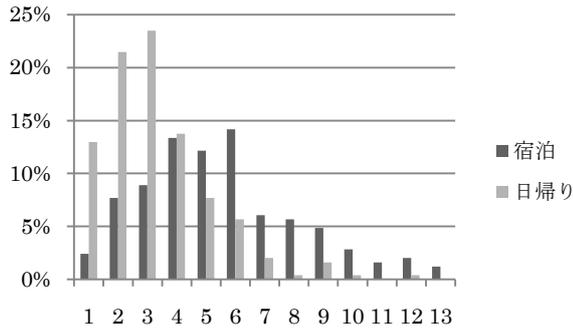
的地を「エリア」、食事・宿泊を含む全着地トリップを「スポット」としてそれぞれを集計した。2種類の集計単位を用いた理由は、複雑な観光行動を大きな集約単位のエリアと集約していないスポットを適切に選択して表現することで、特性がよりわかりやすく表現できると考えたからである。集計した結果、来訪回数別一人当たりの訪問エリア数は一人当たり平均2.55エリア、4.37スポットを訪問しており、多くの人が4エリア以下、6スポット以下で周遊行動をしていた。続いて年齢・来訪回数別の訪問スポット数・訪問エリア数を図一2に示す。



図一2 年齢・来訪回数別訪問スポット・エリア数

年齢別・来訪回数別の行動の違いを見るために、回答者の年齢を若年層と高齢層の二つに分け、訪問エリア数と訪問スポット数の平均値を比較した。リピーターにおいては若年層と高齢層では来訪回数による違いは見られないものの、初来訪者に関しては、年代の違いによって、訪問スポット数に大きな違いが出る。来訪回数によっても様々な年齢層があり、リピーターの方が初来訪者よりも少数周遊する傾向にあることを表している。

また、滞在日数は利用可能時間が大幅に異なるため、宿泊と日帰り別に分析を行った結果を図一3に示す。



図一3 滞在日数別訪問スポット数

その結果、宿泊客の方がより訪問スポット数が多い傾向が確認された。

また、事前に回答者がどのような情報収集を行ったかについて、食事や訪問先に関する情報収集をしていないサンプルの割合の占める割合が、訪問スポット数が少なくなるにつれて大きくなる傾向にあること結果も得られた。したがって、これらの結果より、観光客の年齢や来訪回数、滞在日数、情報収集が訪問地を選ぶ際に影響を与える要因であることが分かった。

5. 訪問地選択のモデル分析

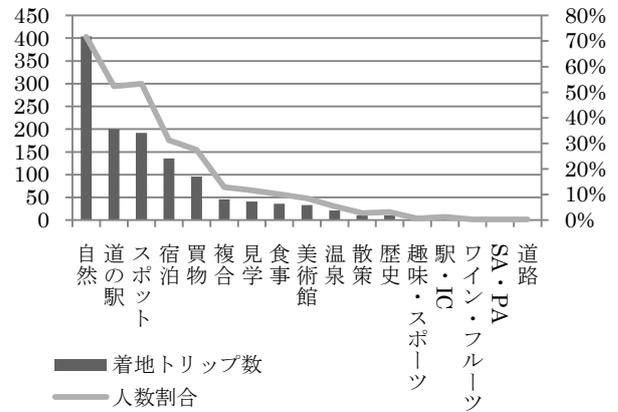
続いて観光客がどのような要因で訪問地数を選択しているのかを統計的なモデルで分析する。選択モデルでの分析は、被験者の利用可能な選択肢を特定する必要があるため、本研究では回答者が実際に訪れた訪問地の目的別特性に従って集約したものをカテゴリーとして分類し、モデル分析を行う。カテゴリーは、図一4に示すような17種類を想定した。

また観光客の周遊特性として、なるべく異なるものを選ぶバラエティシーキング的なものか、リピート行動的な同一の気に入ったことをじっくり周遊する2つの行動パターンの違いを、選択カテゴリー数としてその選択に影響を与える要因の分析を行う。

また、その際に分析するデータは、観光圏域であると推定された山梨県北杜市、長野県茅野市・諏訪

市・南牧村内のみを周遊したサンプルに限った。

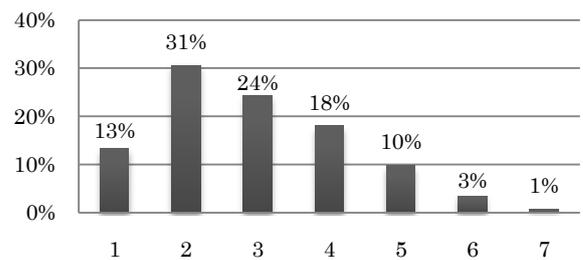
まず、回答者が実際に訪れた訪問地を目的別にカテゴリーとして分類したものを図一4に示す。



図一4 訪問地目的カテゴリーの分布

図一4中における「着地トリップ数」とは、カテゴリー分けされた訪問地に訪れた総数を表しており、「人数割合」は、全サンプル数に対してそのカテゴリー分けされた施設を訪れた人数の割合である。アンケートの配布場所が自然、道の駅、スポットのカテゴリーに分類されるため、上位3カテゴリーへのトリップが非常に多い結果となった。

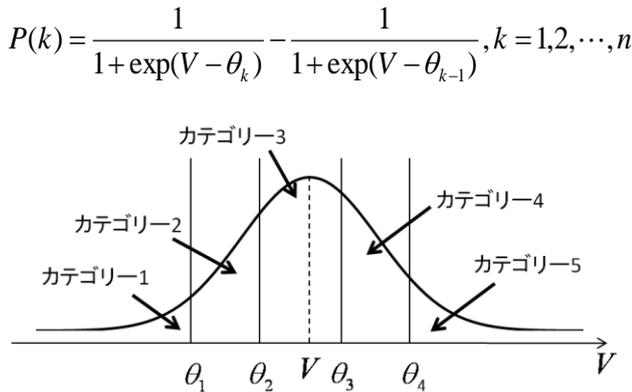
また、回答者の選択カテゴリー数の分布を図一5に示す。



図一5 一人当たりの訪問カテゴリー数

回答者一人当たり平均2.93カテゴリーを選択しており、6カテゴリー以上を選択した回答者は全体の5%未満という結果になった。この分布がランダムに決まっているのか、何らかの特性によって決まっているかを、訪問カテゴリー数選択のモデルで明らかにする。

また、対象地域における観光客の訪問カテゴリー数選択のモデル化に当たっては、順序変数の選択を記述する ordered-response logit モデルを用いる。観光客のカテゴリー選択特性はカテゴリー数の選択効用に基づいて、カテゴリー数を選択するモデルである。



今回の調査に基づく、与えられる選択肢は最大7カテゴリーであるが、6~7カテゴリーのサンプル数が全体の5%未満と非常に少なく θ_5, θ_6 の閾値の推定が困難であるため、選択肢の5~7カテゴリーをまとめて5カテゴリー以上として推定計算を行った。

パラメータを推定した結果を表-3に示す。カテゴリー数の選択には「情報収集媒体数(1:4個以上)」、「年齢(1:40歳未満)」、「滞在日数(1:宿泊あり)」の各変数が有意であった。このことから、情報収集媒体数が多く、40歳未満で、宿泊客であるほど訪問カテゴリー数が多いという結果になった。

7. おわりに

本研究ではアンケートの調査結果に基づいて観光客の訪問スポット数やカテゴリー数の選択を分析した。観光客の訪問カテゴリー数に影響を与える要因として、主に情報収集量・年齢・滞在日数が有意となり、特に宿泊客で情報収集量が多い観光客ほど多くのカテゴリーを選択するという結果が得られた。

今後の課題としては、個人の観光に対する特性などの変数を追加することなど、モデルの更なる改良

が必要である。また、観光客のカテゴリーを組み合わせ特性について、カテゴリー組み合わせを記述できるモデル分析が必要であると考えている。

表-4 パラメータ推定結果

		パラメータ	t 値
V	来訪回数 10 回未満 D	0.333	1.57
	情報収集媒体数 4 個以上 D	0.980	3.70
	年齢 40 歳未満 D	0.377	1.78
	宿泊あり D	1.76	7.31
	関東居住 D	-0.142	-0.66
θ	θ_1	-1.01	-4.31
	θ_2	0.870	3.91
	θ_3	2.16	8.56
	θ_4	3.49	11.7
調整済み ρ^2 乗			0.350
N			317

謝辞

本研究におけるアンケート調査では(株)地域設計、ならびにアンケート配布場所関係者の方々、北杜市観光課にご協力を賜りました。この場で厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 西井和夫, 佐々木邦明, 金賢, 品川円宏, 山根広嗣: 観光情報利用と周遊パターン・滞在時間特性との関連分析, 土木計画学・論文集 Vol.22,2005
- 2) 西野至, 宮島俊一, 西井和夫: 複数目的地を訪問する観光客の目的地訪問順序に関する一考察, 土木計画学研究発表会講演集 Vol.24,2001
- 3) 鈴木大輝, 佐々木邦明: 八ヶ岳南麓地域における観光周遊行動に関する調査分析, 関東支部技術研究発表会,2010